

調査発表型オンライン日本語授業における グループ作業と個人作業の比較

— 課題遂行利便性と学習効果の学生自己評価結果から —

A comparison between group work and individual work in online Japanese language
classes including investigation and presentation

— Based on students' self-assessment of the convenience in task achievement and learning effect —

経営学部現代経営学科

范 一楠

FAN, Yinan

Department of Contemporary Business

Faculty of Business Administration

要旨：本研究は、調査発表型オンライン日本語授業を初めてオンラインで受講した学生にアンケートを行い、その結果からグループ作業と個人作業のあり方について議論を行った。結果として、以下のことが分かった。①学習効果に違いはないが、個人作業はグループ作業よりやりやすいと学生が認識している。②グループ作業がやりやすいと思った学生のグループ作業の学習効果の自己評価が高い。③学年と授業成績との関係性が見られなかった。また、上記の結果と学生の自由記述の内容から、今後の授業の進め方についての提案ができた。

キーワード：オンライン授業、グループ作業、個人作業、課題遂行利便性、学習効果

Abstract： This paper aims to address how to implement group work and individual work based on the survey results of international students who took Japanese investigation and presentation classes online for the first time. The results are as follows; 1) There is no difference in their learning effect, but students often feel more comfortable working individually than working in a group, 2) those who prefer group work tend to rate their own learning effect of group work high, 3) the results mentioned above were unrelated to their grades or academic achievement. This study also illustrates how to design a class better based on the results above and participants' comments on the online course.

I. はじめに

コロナウィルスの感染防止対策のため、オンライン授業の実践が急速に展開されている。日本語の授業に関しては、教員の視点からのオンライン授業の実施方法の検討と反省がいたるところで行われている。例えば、藤本（2019）はインタビューを通して、オンライン授業に対して日本語教員が感じるやりづらさについて分析した。困難な点として、システムの問題に起因する負担、教室活動のやりづらさオンラインの特性の活かし方などを挙げている。

一方、学生の視点からの議論は、心理面に重き

を置いて行われることが多いようだ。YOSHIDA他（2017）は日韓大学生のオンライン協同学習参加前の不安要素と、参加後の自己効力感について調査している。その結果、学生のパソコンスキルなどの不安感を解消し、自己効力感を促進させることで、オンライン協同学習の質が高まると指摘している。では、学生が不安感を解消して自己効力感を高めるためには、どのような授業活動が有効なのだろうか。本研究は、効果的なオンライン授業の実施方法について、学生の視点から検討する。

環太平洋大学では、2020年度の一部の授業がオンラインで行われることとなった。オンライン授業の一つ

の形式として、教員と学生、もしくは学生同士の双方向のやり取りが必要な授業は、事前課題と同時配信による「ハイブリット型」で行われていた。

本学の留学生を対象とした日本語の授業の中には、学生が指定のテーマについて調査し、調査結果を発表する科目がある。通常時はグループ作業で進めることが多いが、オンライン授業によりグループワークが困難となったため、個人作業に切り替えた教員もいる。

今後のコロナウィルスの感染拡大の可能性を見据えて、オンラインによるグループ作業と個人作業のそれぞれの利点と欠点を明らかにする必要がある。その第一歩として、学生の声に耳を傾けることが重要であろう。例えば、どちらが学生にとってやりやすいか、どちらが学習効果が高いと学生が感じるか、それぞれどのような利点があるか、それぞれどのように工夫してほしいと思っているかなどである。

そこで、本研究は学生のアンケート結果を分析することにより、グループ作業と個人作業の違いを明らかにすることを目的とする。それらの結果に基づき、今後の当該授業の進め方について提言する。

II. 研究方法

1. 授業内容の概要

環太平洋大学経営学部において、筆者は2020年前期（5月～7月）に「指定のテーマについて調査し、調査結果を発表する」内容のオンライン授業を2つ担当した。

1つは『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 中級前期』を教科書とした「IPUジェネリックスキルズⅠ」で、1年生を対象とする授業である。以下、「1年生クラス」と呼ぶ。

もう1つは『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 上級』を教科書とした「総合日本語Ⅲ」で、2年生以上を対象とする授業である。以下、「2年生クラス」と呼ぶ。

1年生クラスも2年生クラスも、テーマごとにグループ作業もしくは個人作業を実施した。なお、1年生クラスは「個人作業→グループ作業」、2年生クラスは「グループ作業→個人作業」の順に授業を進めた。1年生クラスで個人作業を先行させた理由は、新しいクラスメートとの関係にある程度築いてからの方がグループ作業がスムーズになると考えたためと、先にグループ作業に必要なパソコンスキルを身に付けてもらうためである。2年生クラスでグループ作業を先

行させた理由は、4月の自粛生活後に対人コミュニケーション能力と意欲を取り戻し、グループで学び合ったことを最後の個人作業に活かす練習をさせるためである。Ⅲ-2で詳細を述べるが、授業の進め順の違いによるアンケート結果への影響は見られなかった。

2. 研究方法

授業の最終回にGoogle Formsでアンケートを実施した。1年生クラスでは28名の回答（回答率100%）を得た。2年生クラスでは30名の回答（回答率94%）を得た。計58名の回答を分析対象とする。

本研究では、アンケートの以下の質問項目の回答を分析する。Q01・02・04・05は5件法、Q03・06・07・08は自由回答による回答を求めた。

- Q01 グループ作業はやりやすかったか
- Q02 グループ作業は勉強になったか
- Q03 グループ作業のいいところは何か
- Q04 個人作業はやりやすかったか
- Q05 個人作業は勉強になったか
- Q06 個人作業のいいところは何か
- Q07 この授業をオンラインで実施する場合のいいところは何か
- Q08 この授業をオンラインで実施する場合のよくないところは何か

分析内容と流れは、以下の通りである。

1. グループ作業と個人作業の違い

グループ作業と個人作業によって、「やりやすかったか」（課題遂行利便性）と「勉強になったか」（学習効果）に対する回答の間に違いがあるか、それぞれの作業方法のいいところに違いがあるか

2. 課題遂行の利便性と学習効果の自己評価結果の相関

「やりやすかったか」と「勉強になったか」に対する回答の間で相関があるか

3. 学年要因と成績要因との関係

クラスによって、グループ作業と個人作業それぞれの「やりやすかったか」と「勉強になったか」に対する回答に違いがあるか

4. オンラインの利点と欠点

この授業をオンラインで実施する場合の良い所と良くない所の記述内容にどのような傾向があるか

統計処理はjs-STAR XR version 1.0.0j, 記述内容の

分析はKH Coder 3を用いる。

Ⅲ. 調査結果

1. グループ作業と個人作業の違い

本節では、グループ作業と個人作業における課題遂行の利便性の学生自己評価結果の違い、学習効果の学生自己評価結果の違い、利点についての自由記述内容の違いについて分析を行う。

グループ作業と個人作業の課題遂行の利便性の自己評価に差があるかどうかについて対応のあるt検定を行ったところ、有意差が見られた($t(57) = 4.5422, p < .05$)。この結果と平均値を見ると、グループ作業よりも個人作業の方がやりやすいと解釈できる。

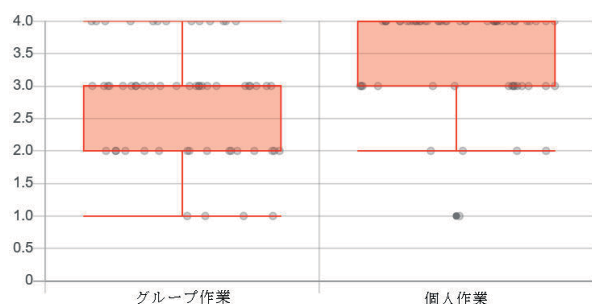


図1 課題遂行利便性のt検定結果

グループ作業と個人作業の学習効果の自己評価に差があるかどうかについて対応のあるt検定を行ったところ有意差は見られなかった($t(57) = 1.1126, ns$)。

上記の結果から、学生がやりやすいと感じているのは個人作業で、勉強になったかどうかについてはグループ作業と個人作業の間に差がなかったことが分かる。

以下に、この授業におけるグループ作業の利点についての記述内容を、共起ネットワークで示す。

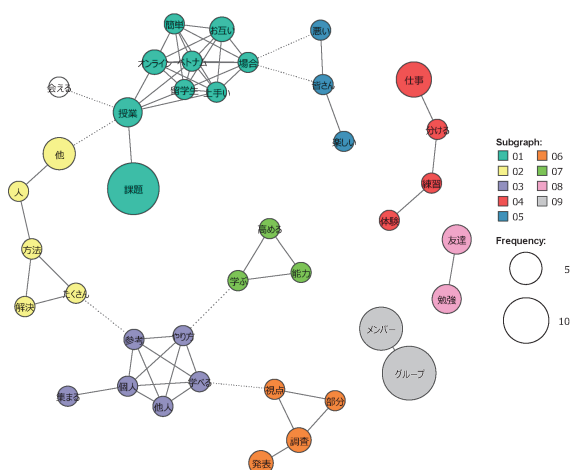


図2 グループ作業の利点

頻出語彙として、「意見」「グループ」「課題」「一緒」の順に多い。以下に学生の回答例を挙げる。

- (1) 相談してから一緒にやる方を決定し、色々な意見があり、アイデアもたくさん参考できる。
- (2) 他人のいいやり方を学べるので、個人をする時に参考になります。
- (3) 対面授業がなかったため、他のメンバーと会えなかったが課題を終了できました。会えなくても、チームワークスキルがアップできました。
- (4) 難しいではあったがインターネット環境でのグループの体験や練習になった。

グループ作業の利点として、Subgraph02, 03, 06のように他の人のアイデアややり方が勉強になったことと、01, 07のようにオンライングループワークのスキルが身に付いたことが挙げられている。しかし、日本語でのインタラクションによる練習の効果や、日本語能力の向上についての言及は少なかった。

次に、この授業における個人作業の利点についての記述内容を、共起ネットワークで示す。

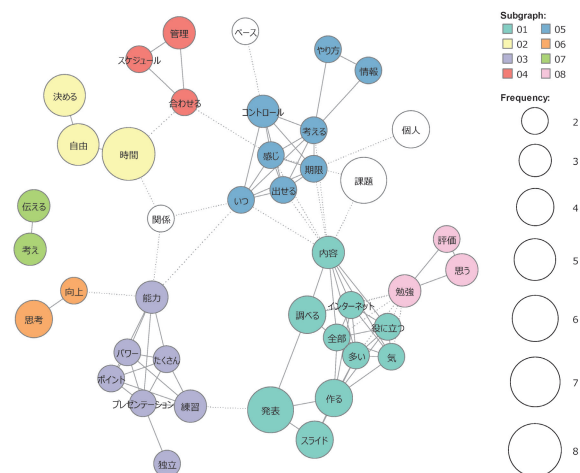


図3 個人作業の利点

頻出語彙として「自分」と「できる」がよく一緒に使用されている。以下に例を挙げる。

- (5) 自分が気になるテーマを選ぶことができる。そして、自分で自分の発表のスライドを作ったので、自分が好きなスタイルを作られる。内容は全部自分でやったので、インターネットで調べたことが多い、勉強になったことも多かった。大変が、役に立つ。
- (6) 自分のペースでコントロールでき、説明せずにやれること。
- (7) 自分で決めて、自分でやるので早くできる。

(8) 自分で調べて勉強できますし、それが評価されるので正解だと思います。

(9) 何でも自分で決められ、自分の意見の通り自由にやり、時間に関係なく、いつでも大丈夫である、最後の点数により自分の能力を示す。

個人作業の利点として、Subgraph02, 04, 05のように自分のペースでできること、01, 03, 06, 07のように全部の作業を一人で担当するので自分のスキル向上につながる事が挙げられている。また、08から、学生はグループへの評価ではなく自分自身に対する評価を望んでいることが分かる。

2. 課題遂行の利便性と学習効果の学生自己評価結果の相関

グループ作業と個人作業それぞれの課題遂行利便性（「やりやすかったか」と学習効果（「勉強になったか」）の学生自己評価結果について相関係数を求めた。その結果、グループ作業の利便性と学習効果の間に中程度の正の相関が認められた（ $r = .563$ ）。個人作業の利便性と学習効果の間に弱い正の相関が認められた（ $r = .260$ ）。また、グループ作業と個人作業の利便性の間に弱い負の相関が認められた（ $r = -.227$ ）。

表1 課題遂行利便性と学習効果の自己評価結果の相関係数

	グループ 利便性	グループ 学習効果	個人 利便性	個人 学習効果
グループ 利便性	-	.563 **	-.227 +	.039 ns
グループ 学習効果		-	.055 ns	.161 ns
個人 利便性			-	.260 +
個人 学習効果				-

上記の結果から、グループ作業も個人作業も、やりやすいと感じた学生のほうが、勉強になった実感も得やすいことが分かる。また、グループ作業がやりやすいと感じた学生と、個人作業がやりやすいと感じる学生に分かれる傾向が窺える。

3. 学年要因と成績要因との関係

本節では、学年と成績がグループ作業と個人作業の利便性と学習効果の自己評価に影響を及ぼすかどうかについて分析を行う。

成績に関しては、すべての授業課題を学生の課題完程度によって95, 90, 85, 80, 75点の5段階評価し

た。なお、締切後から学期終了時までの提出は60点、学期終了時になっても提出されない場合は0点とした。その成績を以て上位群と下位群に分けた。成績評価は授業担当教員の筆者と協力者の語学教員がそれぞれ行い、上位群と下位群の分け方が一致した。

学年（1年・2年）と成績（上位・下位）によって自己評価が異なるかを、参加者間2要因分散分析によって検討した。その結果、グループ作業の利便性、学習効果、個人作業の利便性、学習効果ともに学年と成績の主効果が有意ではなかった。

表2 グループ作業の利便性の分散分析結果

S.V	SS	df	MS	F
学年	0.0011	1	0.0011	0.00 ns
成績	0.0259	1	0.0259	0.03 ns
学年 x 成績	2.0584	1	2.0584	2.75 ns
subj	40.4354	54	0.7488	
Total	42.5208	57	+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$	

表3 グループ作業の学習効果の分散分析結果

S.V	SS	df	MS	F
学年	1.3448	1	1.3448	2.42 ns
(学年 at 上位	3.111	1	3.111	5.59 *)
(学年 at 下位	0.0153	1	0.0153	0.03 ns)
成績	0.0899	1	0.0899	0.16 ns
(成績 at 1年	1.336	1	1.336	2.40 ns)
(成績 at 2年	0.5355	1	0.5355	0.96 ns)
学年 x 成績	1.7816	1	1.7816	3.20 +
subj	30.0545	54	0.5566	
Total	33.2708	57	+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$	

表4 個人作業の利便性の分散分析結果

S.V	SS	df	MS	F
学年	0.1249	1	0.1249	0.25 ns
成績	0.7445	1	0.7445	1.47 ns
学年 x 成績	0.0707	1	0.0707	0.14 ns
subj	27.3407	54	0.5063	
Total	28.2807	57	+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$	

表5 個人作業の学習効果の分散分析結果

S.V	SS	df	MS	F
学年	0.0918	1	0.0918	0.19 ns
成績	1.2769	1	1.2769	2.71 ns
学年 x 成績	1.0213	1	1.0213	2.17 ns
subj	25.471	54	0.4717	
Total	27.8609	57	+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$	

この結果から、Ⅲ-1とⅢ-2の結果はどの学年、どの成績群にも共通するものと推測できる。

4. オンラインの利点と欠点

本節は、この授業をオンラインで実施する利点と欠点についての学生の回答を分析する。

まず、オンラインで実施する利点についての回答のクラスター分析結果を以下の図に示す。

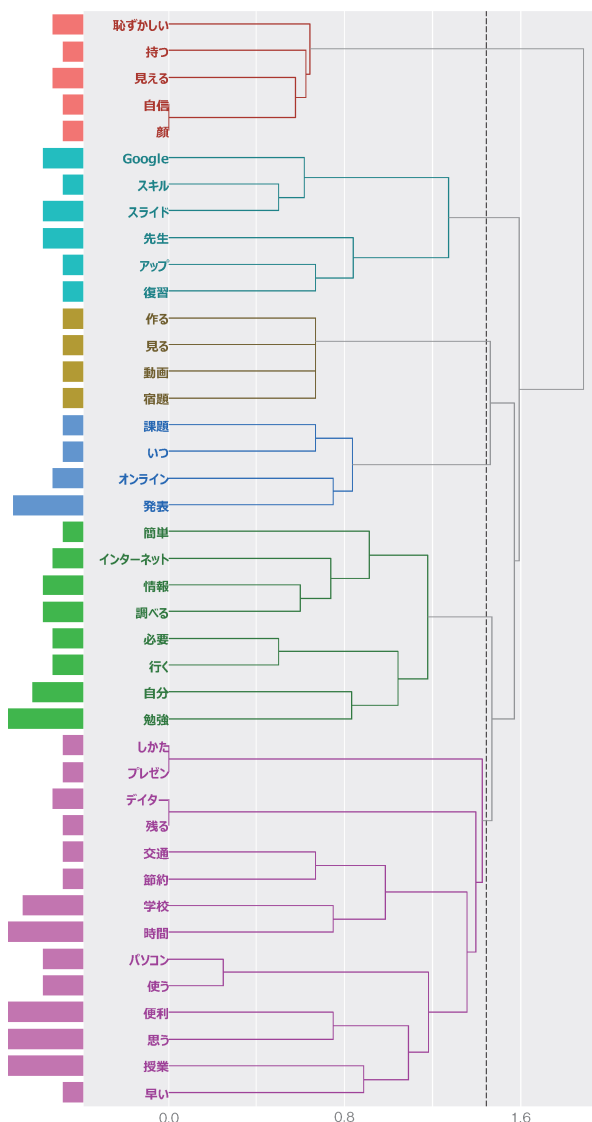


図4 オンラインの利点のクラスター分析

特に授業内容に関係しているのは上から5つ目のカテゴリーである。調査や発表の準備をする際に、必要な情報をすぐインターネットで簡単に調べられることが利点だと学生が感じていることが分かる。以下に回答例を挙げる。

- (10) 宿題があるとき、すぐにインターネットで調べたことができる。また、発表の動画を作って互いに何回も見られる。

次に、オンラインで実施する欠点についての回答のクラスター分析結果を以下の図に示す。

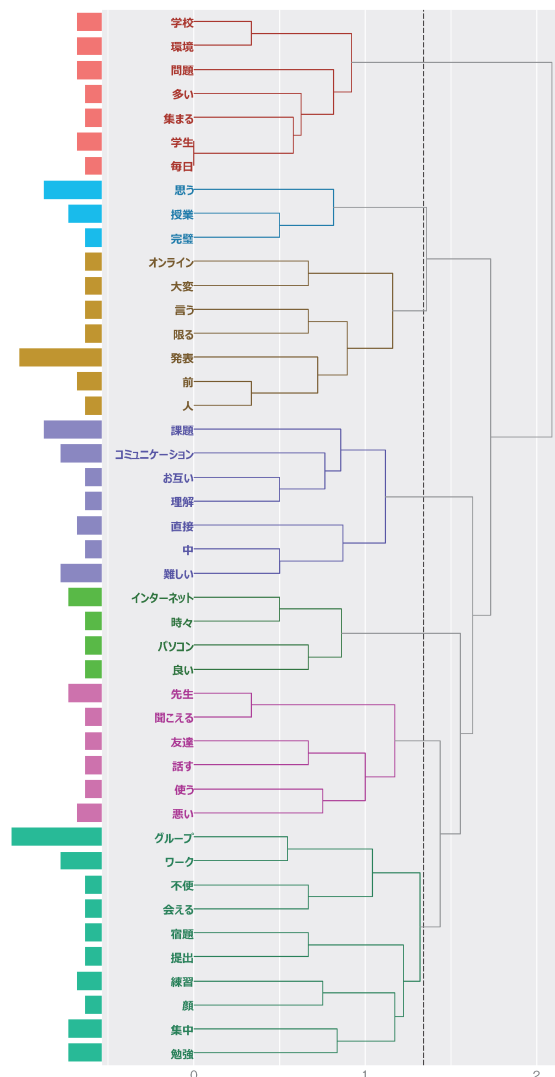


図5 オンラインの欠点のクラスター分析

上から3つ目、4つ目、6つ目のカテゴリーとも、オンラインや動画で発表ができて、たくさんの人に向かって直接発表したりコミュニケーションしたりできるようになったとは限らないという意見を反映している。以下はその回答例である。

- (11) 個人的にオンライン授業が好きですが、視聴者と関わるという発表に大切なスキルを身につけることはできません。それで、発表動画ができたと言っても、実際に多くの人の前で同じように発表できるとは限りません。
- また、最後のカテゴリーから、グループワークは対面時より難しいと分かる。以下はその回答例である。
- (12) 友達とほとんど連絡を取らなかったの、グループワークが難しくなった。

Ⅳ. 考察

Ⅲの結果から、今後の調査発表型日本語授業に対して以下の提案ができる。

1つ目は、グループ作業の利便性を高めることである。今回の調査でグループ作業は個人作業より利便性が低いこと（Ⅲ-1）と、グループ作業の利便性と学習効果の間に相関関係があること（Ⅲ-2）が分かった。その結果から、グループ作業の利便性を高める余地があることと、それによる学習効果の向上が期待できることが示唆される。今回はグループ作業と個人作業の学習効果に差が見られなかった（Ⅲ-1）が、利便性を高めることによってグループ作業の学習効果が個人作業を上回ることも考えられる。また、そのことは学年や授業課題成績の高低に左右されず（Ⅲ-3）、幅広い学生層に言える。

2つ目は、「日本語の上達」という授業目標を常に念頭に置いてグループ作業をさせることである。自分の関心のあるテーマについて調査や発表をする場合、学生は内容面や作成物に注意を払いがちだが、日本語の授業として、言語知識の運用にも重点を置きたい。学習した語彙や文法を資料や発表に使ってみるだけでなく、グループワークなどのインタラクション（Long, M. H., 1977）、プレゼン準備というタスクを協働して遂行すること（Long, Mike., 2015）によって第二言語習得が進む。

今回の調査グループ作業の利点についての回答内容に日本語能力の向上についての言及が少なかった（Ⅲ-1）原因は、グループワークでの母語使用だと考えられる。いずれのクラスも履修学生に母語が同じ学生が多かった。また、オンライングループワークの複数の小部屋に教員が同時に参加することができなかった。

その問題を解決するためには、学生の意識向上と同時に、授業デザインの工夫が必要である。具体的には、授業時間内にグループワークをさせること、授業時間外に個人作業の事前調べや、グループ共同編集で事後まとめをさせることが有効であろう。それによってグループメンバーと連絡が取りにくい、ペースが合わない（Ⅲ-1）などの問題も解決できる。

3つ目は、グループ作業でも学生一人一人に焦点を当てて評価することである。自分自身の能力が反映された評価を得たい（Ⅲ-1）という学生の声には、グループでの担当部分に対する個別評価やグループメンバー相互評価などで対応できる。グループ評価との併

用によってグループ作業の学習効果を向上できる。

4つ目は、グループ作業でお互いに学んだことを、最後に個人作業の課題で生かす機会を提供することである。グループメンバーから学んだアイデアややり方などを個人作業の際に応用する学生もいた（Ⅲ-1）。今回の授業のようにグループ作業と個人作業の両方を設けることにより、グループ作業と個人作業の両方の利点を生かして授業の学習効果を上げることが期待できる。

Ⅴ. まとめ

本研究では、調査発表型オンライン日本語授業の受講学生のアンケート回答を分析した。その結果、以下のことが分かった。

- ①学習効果に違いはないが、個人作業はグループ作業よりやりやすいと学生が認識している
- ②グループ作業がやりやすいと思った学生のグループ作業の学習効果の自己評価が高い
- ③学年および授業成績と、上述の結果の間に関係性が見られなかった

また、上記の結果と学生の自由記述の内容から、今後の授業の進め方についての提案ができた。

<参考文献>

- (1) 藤本かおる (2019) 「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究: 一担当教師へのインタビューを中心に一」『日本e-Learning学会誌』19 (0), 27-41.
- (2) Long, M. H. (1977). *Face to Face*. London: Evans Bros.
- (3) Long, Mike. (2015). *Second Language Acquisition and Task-Based Language Teaching*. Wiley-Blackwell.
- (4) Hiroki YOSHIDA, Seiji TANI, Tomoko UCHIDA, Jitsuko MASUI, Akira NAKAYAMA. (2017). A Comparative Study of Japanese and Korean Language Learners' Self-efficacy and Anxiety in Online Cooperative Learning Learning, 常葉大学外国語学部紀要, 33, 13-23.